

# プロデューサーズ

2006(平成18)年2月7日鑑賞(試写会・ナビオ TOHO プレックス)

★★★★



監督・振付＝スーザン・ストローマン／出演＝ネイサン・レイン／マシュー・ブロデリック／ユマ・サーマン／ウィル・フェレル／ゲイリー・ビーチ／ロジャー・パート (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／134分)

……2001年にトニー賞史上最多12部門を受賞したミュージカル『プロデューサーズ』が映画化。主役は、史上最悪のミュージカルをプロデュースして、一攫千金を狙う2人のおじさんプロデューサー。いかにコけるショーをプロデュースするか? 「逆転の発想」から生まれるストーリー展開は、バカバカしいものだが、いかにもブロードウェイ・ミュージカルらしく(?)、楽しさいっぱい。そのズッコケぶりをとことん楽しむことができれば、あなたも一流のエンタテインメント通……?

## 私にとってのハリウッドとブロードウェイ

アメリカには、映画のハリウッドとミュージカル(ショー)のブロードウェイという2つの「聖地」があるが、私は小さい時から映画もミュージカルも大好き。といっても、チャンバラものの日本映画は小学生の時親に連れられて観ていたが、ハリウッドの洋モノを観るようになったのは、中学生になった1962、3年頃から。もっとも、ハリウッド映画は「封切りモノ」を観ることは少なく、3本立て55円の2番館、3番館中心だったから、1950年代の名作が多かった。ミュージカルは、中学生の時『ウエスト・サイド物語』を見逃したため、高3の時に観た『サウンド・オブ・ミュージック』が最も印象強いもので、この他には、『マイ・フェア・レディ』『王様と私』『南太平洋』などを観た。

といってもこれはホンモノの舞台ではなく、すべて映画版のもの。松山に住んでいた中学・高校時代の私にとって、ホンモノの舞台でミュージカルを観るとい

うことは夢のまた夢。それが場所的にも経済的にも当然のように可能となったのは、弁護士になってから……。

しかして、その原点は1980年代に観た劇団四季の『CATS』と『レ・ミゼラブル』か……？

## これぞブロードウェイ、これぞショー、そしてこれぞアメリカ！

私は知らなかったが、この『プロデューサーズ』という作品は1968年に映画化されたものがオリジナルとなって、2001年にブロードウェイでミュージカル化されて大ヒット。そしてトニー賞史上最多12部門を獲得したとのこと。それに気をよくして、舞台で演出・振付を担当したスーザン・ストローマン自身が初監督したのがこの映画。2人のプロデューサーズには、ブロードウェイ版のオリジナル・キャストであるネイサン・レインとマシュー・プロデリックが出演。『王様と私』『サウンド・オブ・ミュージック』『レ・ミゼラブル』『屋根の上のバイオリン弾き』のような歴史的・思想的・哲学的な視点に立ち入ることなく（？）ただとにかく、明るく楽しくブロードウェイのミュージカル（ショー）の世界を描くもの……？ その意味では、『コーラスライン』や『キャバレー』『シカゴ』と同じ系譜（？）だが、バカバカしさという意味ではそれまでの常識を破る破天荒なもので、まさに、これぞブロードウェイ、これぞショー、そしてこれぞアメリカ！ という作品……。

## ヘンな奴その1——2人のプロデューサー

タイトルどおり、この映画の主人公となるのは2人のプロデューサーであるマックス（ネイサン・レイン）とレオ（マシュー・プロデリック）。といっても、マックスはもともと現役バリバリのプロデューサー（？）だが、レオはしががない会計士（公認会計士ではない！）だった人物。ところが、ちょっとしたアイデアをマックスに紹介したため、マックスからコンビを組んでプロデューサーになることを強引に勧められ「We can do it!」と迫られることに。小心者で内気なレオは「I can't do it」とそれを拒否したものの、刑務所暮らし同然の会計士の職場に戻ったレオは突如方針転換。ここに、ヘンなおじさん2人のプロデューサーコン

ビが結成されることに……。

## 何ゴトにも「逆転の発想」が必要

今の世の中、何ゴトも常識的に考えていたのでは、人と同じことしかできないのは当然。そこでよく言われるのが「逆転の発想」だが、凡人にはなかなかそれができないもの。ちなみに、それまではみんな「太陽が地球の周りを回っている」と信じていたのに、ただ1人「地動説」を唱えたニコラウス・コペルニクスや、異端裁判と闘ってまでそれでも「地球が太陽の周りを回る」と主張したガリレオ・ガリレイが、史上最大の「逆転の発想」者だろう。真面目にコツコツ働いて大成功した例は、松下幸之助のナショナルやトヨタの例に見られるが、それでもトヨタの「看板方式」など、隠れたところ(?)ではさまざまな「逆転の発想」に近い新工夫も……。

ブロードウェイ・ミュージカルのプロデューサーとして成功するためには、何が必要か？ 普通に考えれば、その答えは明らか。しかし、しがない会計士のレオがマックスの帳簿を見ている中でふと思いついたアイデアは、「出資者から金を集める→ショーがコケる→出資者に配当を払わなくてすむ→プロデューサーが儲かる」というショー・ビジネス界でのみ通用する可能性のあるヘンな仕組み。もっとも思いついたレオ自身は、「もしショーが成功すれば詐欺罪で刑務所行きです」とビビってしまう。これが小心者の小心者たる所以だが、「生き馬の目を抜く」世界の中で生き残ってきた百戦錬磨のプロデューサーであるマックスは、さすがに度胸が座ったもの。いいアイデアは採用し、実行してこそ意味がある！ 早速、史上最低のズッコケるショーを成功させるべく、さまざまな策をめぐらせ始めることに……。

## ヘンな奴その2——脚本家のナチ野郎

2人のプロデューサーがそろって歌う『I Wanna Be a Producer』で盛り上がった後は、脚本家と演出家探しの実務作業に。競争社会アメリカの中でも、最も激しい競争をしているのがブロードウェイの世界。したがって、採用してもらいたいと応募してくる台本はいくらでもあるため、それを読み、史上最悪の台本を探

すだけでも大変な作業。そんな努力を続ける中、マックスが発見したのはコケることまちがいなしと確信した史上最悪の台本『春の日のヒトラー』。タイトルからして怪しげなものだが、その台本の作家はナチスを信奉するドイツ移民のフランツ・リープキン（ウィル・フェレル）だった。

このフランツはなぜか1人でたくさんの鳩たちと生活しているヘンな奴。ユダヤ人が底支えしているアメリカ社会（？）にあっては、ナチス・ヒトラーは決して許せない存在。したがって、ブロードウェイの舞台上「ヒトラー万歳！」というような作品が許されないことは明らか。ところが、あえてそれを狙ったマックスの思惑は……？

ヒトラー総統の魂に忠誠の誓いをたてるという屈辱に耐えて、やっと契約書にフランツのサインをもらったマックスとレオは意気揚々だったが……？

### ヘンな奴その3——ゲイの演出家

舞台を生かすも殺すも演出家の腕次第。それほど演出家のウエイトは大きいものだ。そう認識しているマックスが白羽の矢を立てたのは、いかにも自由の国アメリカらしく（？）ゲイの演出家ロジャー・デ・ブリー（ゲイリー・ビーチ）。ドレスを着て、華々しく登場したロジャーの傍にはアシスタント兼恋人のカルメン・ギア（ロジャー・バート）もいるし、その他大勢、気色の悪い（？）ゲイの芸術家たちが……。

ゲイを讃歌する彼らの気持は私にはよくわからないが、「ショーは面白くなくっちゃ」という思想はよく理解できる。したがって、彼らが『春の日のヒトラー』などという暗い台本に興味を示さなかったのは当然。しかし、そこで引き下がったのではブロードウェイのプロデューサーの仕事はつとまらない。あの手、この手の説得の妙を尽くすことによって、このロジャーの口から、「ハードゲイなドイツ兵のダンス」の構想を引き出すことに成功。これでバッチリ、史上最悪のショーが完成するはず……。

### 200万ドルの資金集めは？

この映画が何といっても最悪なのは（？）、何よりも必要な資金集めをめぐる

シーン。マックスもかつてはブロードウェイの王様と言われた大物プロデューサーだったが、今は落ち目となり、新作のミュージカルの『ファニー・ボーイ』も初日＝楽日という有り様。こんなマックスにとっての頼りは、かつてのファンであった老婦人たちからの寄付。映画が始まると早々に、マックスの事務所を訪れてきた老婦人にちょっとエッチなサービス(?)をして、小切手をせびるシーンが登場するが、まずこんなシーンはあまり目にしたくないもの。

そして最悪(?)は、脚本家と演出家が決まった後、200万ドルの資金集めのためにマックスが老婦人たちから資金集めをする集団ダンスシーン……? プロデューサーを夢見るレオが華やかな舞台の上で、露出度の高いショーダンサーたちと一緒に踊るシーンは、内容はともかく目の保養になるものだが、オバさんを通り越した老婦人たちの集団ダンスは、積極的に観たくないもの……。まあこれもプロデューサーの務めだと割り切り、肉体労働に精を出すマックスに対して、同情だけはしておこう……。

## 紅一点も、ヘンなスウェーデン女

ブロードウェイ・ミュージカルは、本来ならば美女が登場してうっとりさせてくれる作品がベスト。しかし、この作品はそういう志向ではなく、あくまで中年のヘンな2人のおじさんプロデューサーが主役だし、その他の関係者もヘンなおじさんばかり。

そんな中、紅一点として登場するのが、あの『キル・ビル Vol.1』(03年)、『キル・ビル Vol.2』(04年)でカッコいい太刀回りを見せた長身女のユマ・サーマン。これだけ身長があれば演ずる役柄が限られるのはやむをえないが、この『プロデューサーズ』では背の低い2人のおじさんとのバランスを考えて、彼女が起用されることになったはず……?

もっとも、彼女が演ずる長つたらしいフルネームを持ったスウェーデン女のウーラも、最初からセクシーさを売りモノにするヘンな奴。しかも、なぜかうーラとレオはゾッコンの間柄になってしまうが、大女のウーラと小男のレオが2人で踊るダンスは見モノ。こんなウーラを、マックスとレオは秘書兼受付嬢として即採用したが、果たして舞台上で彼女はどんな役柄を……?

## ヒトラー役は？

『春の日のヒトラー』最大のポイントは、ヒトラー役を誰が演ずるかということ。ブロードウェイ恒例のオーディションが実施され、「歌うヒトラー」と「踊るヒトラー」のテストがくり広げられたが、ロクな奴がない。そこで、あまりの出来の悪さにイライラしたフランツが、自分は採用する側に座っていたにもかかわらず、突如舞台上上がり、「ドイツの歌はこのように歌うんだ！」とばかり見本を見せることに。するとこれを見たマックスは、即座にこのフランツをヒトラー役に決定。何ともいやはや……？

## ホントに最悪のミュージカル……

どんな名プロデューサーでも、舞台初日は緊張するもの。ちなみに、「あの業界」での初日の縁起かつぎをめぐる常識や格言がいろいろと紹介されるので、興味のある方は是非その勉強も……。

それはともかく、満席の観客を前に上演が始まった『春の日のヒトラー』の出来は……？ 皆さん自身がスクリーン上で展開される舞台の様子を観て判断すればいいことだが、私が観てもやはりこりゃ最悪のミュージカル。なぜ第1次世界大戦後、疲弊したドイツで英雄の登場が期待されたのか？ なぜそれがナチスなのか？ ヒトラーは期待された英雄なのか？ そして、「戦争だ！」と国威を発揚していくドイツ国民の姿は正常なのか？ などなど、まともな観客ならこんな冒頭のシーンを観ているだけで、疑問を抱き、気分が悪くなるのが当然……？

したがって、遠慮深い日本人観客と違って、物事の是非や好き嫌いのはっきりしているアメリカ人観客は席を立つのも早いもの。1人また1人と席を離れていく観客の姿を見て、マックスとレオは密かにほくそ笑んでいたが……？

## 形勢逆転はやはりヒトラーの力

舞台初日をめぐる格言にはいろいろあるらしく、「幸運を！」というのはダメで、逆に「脚でも折ってしまえ！」と悪口を言うのがいいらしい。ところが、この映画が最悪なのは、ヒトラー役のフランツが舞台へ上る直前にホントに脚を折

ってしまうこと。

そこで即座に名プロデューサーのマックスが考えた代役が、ゲイのロジャー。当初は嫌がるロジャーだったが、アシスタントのカルメンから勧められるや、もともと乗りやすいタイプ(?)のロジャー。「私、やってみるわ!」と張り切って舞台に登場。

男性的で勇ましく、ドイツ国民の期待を一身に背負った「フランツ」ヒトラーの登場のはずだったが、なよなよした「ロジャー」ヒトラーの登場に観客はビックリ。ひょっとして、この作品はヒトラー讃歌のミュージカルではなく、あのチャールズ・チャプリンの名作『チャップリンの独裁者』(40年)と同じく、ヒトラーを皮肉り、厳しく風刺したミュージカル……? そう理解した観客は再び席に戻り、上演が終了した時にはスタンディングオベーションの大拍手。こりゃ、えらいこっちゃ。ヒトラー役者の力によって、マックスとレオの思惑は大きく外れることに……。

## その後は映画を観てのお楽しみに……

ここまでが史上最悪のミュージカルをつくり、一儲けしようとたくらんだマックスとレオの思惑が大きく外れてしまったという、面白おかしい物語。スクリーン上で展開されるここまでの物語は、ヘンな奴が次々と登場したり、あまり観たくもない老婦人の集団ダンスシーン(?)が登場したりするものの、いかにもアメリカ的なブロードウェイ・ミュージカルの典型として十分楽しめるもの。しかし、マックスとレオの思惑が完全に外れ、ショーが大成功してしまった2人に待ち受けていた現実は……? そして、それを受けて2人はその後どのように生きていくのだろうか?

大げさに言えば、それがこの映画の第2部の内容なのだが、それはこの映画を観てのお楽しみに……。バカバカしいと思いつつ、それなりにアツと思わせる展開もたくさんあるよ。そして、最後は当然ながらハッピーエンド……。さて、そのハッピーエンドとは?

2006(平成18)年2月8日記